

ひと街にと

No. 42

語り継ごう、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです。
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが、
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら、
いつか来た道まで戻ってみましょう。

雪の迷路の 鬼ごっこ

町のあちこちに広場のあった時代は、子供たちも冬ならではの遊びを考え出したものです。雪を踏み固めて膝ぐらゐの高さの迷路を作ったの鬼ごっこ。グッドアイデアはどこどころに設けた隣の道との連絡路です。道以外とこのころを通ってはいけないルールですか

ら、鬼が目指す相手がいると見当をつけた道を追いかけても、ひよいと横道に入られてなかなかタツチできないというわけで、鬼の番は大変でした。自分たちで作って自分たちで遊ぶ——仲間がたくさんいなければ面白くない遊びが多かったような思い出があります。



二〇二三年 冬(年四回発行)

発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南一条西十八丁目
TEL(011)561-1598

編集：ひと街にと 刊行会

札幌市中央区北一条西十七丁目
北海道不動産会館四階

TEL(011)633-6655

“札幌の奥座敷” いずこ——。

温泉ブームです。公営のものから観光地や秘湯とされるところまで、人の行かないところはないくらい。車を飛ばして日帰り入浴でもいいという人もたくさんいて、泊まってお湯と料理とお酒をゆっくり楽しんでという年配には理解しがたいようです。ですから定山溪温泉にも当然、「札幌の奥座敷」などというキャッチフレーズは合わなくなっていることなのでしょう。きれいどころがいたのは昭和40年代くらいまででしょうか。一泊の旅行や宴会にしても、繰り出すというぜいたくな気分が伴ったものです。定

鉄も走っていましたから、今より遠く感じたせいもあるのかもしれません。

まちのメモリー——定山溪温泉



昭和36年12月。温泉情緒たっぷり(右とともに札幌市文化資料室所蔵)



昭和27年1月。旧定鉄の定山溪駅。山スキーの一行のようだ

時の街角

北海道開拓の村から

伝統技術が仕上げる旗や幟、幕、半てん。どこにあっても祝い事や行事などに欠かせません。旭川市で現在も続いている染舗の前身です。



発展途上の旭川で強く主張した「和」。

旧近藤染舗

明治以降の北海道の発展を語る時に、欧米の技術がクローズアップされがちですが、本州から伝えられた和の文化にも、道産子の暮らしを支えてきたものが少なくありません。差し詰め徳島県から持ち込まれた藍染めなどはその一つ。札幌市北区拓北に残る興産社町内会の名称は、

だ後に、大阪で経験のあった染物業の技術を生かしてのものです。

当時の旭川は屯田兵の人植や鉄道開通、第七師団の移住などで、道北の中核都市としての賑わいを見せ始めていました。大正二年（一九一三）に新築されたこの店舗兼住宅は、とても粋に見えたことでしょう。

旭川で明治三十一年（一八九八）に創業した近藤染舗も、やはり徳島県から同二十三年に新篠津村に移住した近藤仙蔵・圓蔵兄弟が農業を営ん

切妻屋根で平入り（棟に対して直角方向に出入り口を設けたもの）の平屋一部二階建て。正面の店舗部分に差し掛け屋根のひさしがあり、その上の看板が効いています。青い半てんと御詠染物の文字の組み合わせ、バックの素通し空間はおそらく本州



切妻に差し掛け屋根、青い半てんの看板。洋の様式が街に広がっている中にこの「和」

の大工さんの発想でしょう。店内に入ると広い畳敷きの商用の間に沿って、奥までL字型の土間、いわゆる通り庭です。ほかに炬を切った茶の間、仏間と座敷。茶の間の隣は板敷の台所になっています。このことごとく和風。すでに道内では一般的となっていたはずの、洋の要素はどこにも見当たりません。そんな心意気が、今日まで盛業の続いている要因の一つでしょうか。旭川市の近藤染工場のホームページにアクセスしてみると、華やかな数々の大漁旗に目を奪われます。



正面入ってすぐの商用の間に始まる。茶の間と仏間をすべて和室で構成している。板敷きの土間は安間から右手の建物奥まで

人のいしぶみ

名前には知らなくてもその人の功績を聞く。と、大変な苦勞があつたのだろう。など思うことがよくあります。時あたかもスキー

ーシーズン真っ盛りですが、大正時代からその普及に努めたのが大野精七（一八八五—一九八二）です。

出身地である茨城県や同県河内町の偉人伝（HP）には「医学者にして日本スキー界の巨星」とあります。大正十三年に北大医学部教

スキーして頂けますか。

授として赴任して以来、生涯をこの地にうずめようと雪に親しみ、北大スキー部長に就任。全日本スキー連盟の設立にも参画しました。幻となった第五回冬季オリンピック札幌大会招致に奔走。その活動が七二年の開催につながります。さらには宮様スキー大会の開催や大倉山ジャンプ建設に尽力と、枚挙にいとまがありません。ジャンプや複合など日本人選手活躍が目立つ今日、グレンデスキーだけでなく歩くスキーを家族で楽しむ時代になりました。大野は産婦人科学の権威。立派な子供を産んでもらい、冬を健康で明るく過ごしてほしいという願いが脈々と受け継がれています。

大野精七博士顕彰碑（大倉山ジャンプ競技場）



上方の観覧席への昇り口にある大野博士顕彰碑



上は大倉山ジャンプ競技場の観戦風景。日本選手の活躍も目立つ。下はグレンデスキーと歩くスキー（2枚とも札幌市観光課提供）

※参考文献／北海道開拓の村・開村10周年記念誌

北海道開拓の村 所在地／札幌市厚別区厚別町小野幌五〇一 電話／〇二八九八二六九二

※参考文献／中史区・歴史の散歩道



まちの仕事

たたみ工房柴田

柴田 卓哉さん

札幌市白石区北郷三条三丁目
一―二九九
電話〇二―八七九 六二八二



小学校の同級生というご夫妻
亜弥さんはいま子育てが大変

「丸に二つ雁金」の家紋と
電話番号の入った営業車を見て
注文が入ることも多い

創業の古さを誇るしにせも見られる一方で、需要の減少や後継者のいないことで廃業していくお店も多いのが職人仕事の世界です。畳の業界も例外ではないようですが、三年前に開業し、夫婦で畳ドクターの資格を持っている「たたみ工房柴田」の柴田卓哉さん(三三)を訪ねました。

和室ある限り夫婦そろって畳ドクターの称号。

母方の実家が小樽で三代続く畳店という卓哉さん。札幌育ちですが、この仕事を志したのはごく自然なことでした。埼玉県畳高等職業訓練校を卒業後、浦和市や札幌市の畳店で経験を積んでの独立です。今は幼い二児の子育てに忙しい奥さんの亜弥さんは、開業して毎日のように店を手伝うようになってからこの仕事を覚えたと努力家。夫婦そろっての一級技

能士という国家資格が光ります。畳ドクターとは、全国畳産業振興会に加盟している畳



いないとできない、やはり奥の深

職人のうち、職歴や国家資格を持っていることなどを条件に与えられる称号です。ほかにベテランの職人さんが二人いて、忙しいときには、四人で一日五十枚の張り替えをこなすこともあるとか。マンションはもとより一戸建て住宅からも和室がなくなりつつある昨今、新築してから二十年、三十年とたった年配の



仏間の変型畳の表替えを手かける柴田卓哉さん
ほとんどが機械作業で昔のような道具(下)の出番は少ない

い職人仕事でしょう。加えて卓哉さんには「国産の畳表しか使わない」というこだわりも。中国産が一般的になってきている近年ですが、品質の良さではやはり国産。現在は九割が熊本県で生産されています。縁なしの琉球畳やバリアフリー用の薄畳、ベットの介護の必要な人がいるお宅に丈夫な和紙のカラー畳など、少しずつ時代の波にも対応していますが、まだまだ伝統の「和」の需要に届いていききたいという柴田さん夫婦です。



亜弥さんの得意技は縁付け。2人のベテランの職人さん心強い存在だ

お宅の注文が中心です。仕事は畳の傷み具合で新調、表替え、裏返しに三つに分かれ、新調は畳床からの作り替え。ゴザを替える表替えの仕事が頻繁なのは、「裏返し」の時期を逃しているお客さんが多い(卓哉さん)からだそうです。作業も昔のように庭先ですることではなく、お宅から畳を自社工場へ運び込んでの機械による裁断や逢着。手作業の出番はほとんどありません。「大きなミシンのようなもの」と亜弥さんは言いますが、畳のことを知り尽くして

道具で道草30年

坂一敬

レトロスペース坂会館館長
坂栄養食品開発部長

高校に入学して一人の先生にお会いした。ゴムの長靴を履き、ツギの当たったズボンとヨレヨレの上着を着た三角先生である。春先だから長靴なのかと思っていたら夏になってもそのまま、一年を通してスタイルは全く変わらなかった。夏休みには私の家に訪ねてきてフィールドワークを勧めてくれた(おそろくみんなの家を回っているのだらう)。受験戦争が少しづつ忍び寄ってきていたのだけれど、先生の生物の授業はそんなものはどこ吹く風で、人生を熱く語ってくれた。

人生の師とは……。

放置されたままになっている国有林の植生を調べるべく、たった一人で道を作り、ベースキャンプの小屋を作り「シャングリラ」と名づけた。そこにクマが出るのをかまわず通っておられるとか。私も久々にキスリング(リュックサック)を背負い、お供をした。「クマが出て、私は坂君を助けたい、また私をガードする必要もない」。



昨年夏、先生のお宅で。左から筆者と先生、右端が奥さん。隣の女性は教え子一人で国会議員(当時)

教科書の疑問点を聞くとズバツと答えが戻ってきて、元北大の助手さんはさすが違うんだとおもったもの。後年、先生の授業が大学受験に役立たない、ちゃんとまともな授業をしてくれと、生徒の間からブーイングが聞こえ、父兄を巻き込み、先生が旭ヶ丘に居づらくなった話を聞かされた。同窓会の通知が我が家にも来る。しかし、高校を大学受験の予備校としか考えないバカな後輩と酒を飲んで料理がまずくなるだけなので、行ったことはない。レトロスペースに奥さんの久美子さんが訪ねて来て、また何十年かぶりに先生にお会いすることができた。昔と同じ長靴姿の先生がそこにいた。

道は細く、両側は込み入った樹木が密生しており、逃げ道は全く無い。心配したスタッフの中本がつけてくれた鈴の音だけがたよりだ。シャングリラに着いた時はさすがにホツとした。夜、ランタンの灯りの下、ラジウスで沸かして飲むコーヒーのうまいこと。シユラフを並べ三角透の語る人生を聞きながら、眠りに落ちていった。クマちゃんがドアをノックしないことを祈りながら。師弟はこうあるべきと思っっている。こういう先生に会えない人が自分探しの旅に出かけるのだらう。

印刷の話 ① 絶滅危惧種!! 活版印刷

ワープロが使われるようになって、ついぞ聞かれなくなった「活字」という言葉。活字そのものを見たことのない世代もいる時代になっています。刷った紙の表面の凸凹、インキのにおい——活版印刷はどこへいった。



大小二十六文字のアルファベットと異なっており、日本語は文字の数だけ活字が必要。右の活字棚から拾って文選箱へ

日本には幕末にオランダ製の印刷機が伝えられて以来の歴史がある活版印刷が、もはや風前のともしびです。名刺や案内状などを作っているごく一部の印刷会社にしか残っておらず、活版で刷られる本など皆無の時代になってしまいました。

確かに仕事が「きつい、暗い、汚い」の3Kの代表のような側面もありましたが、オフセット印刷に取って替われ、さらにデジタル化で追い打ちをかけられた結果といえます。とはいえ、その実アナログな作業過程には懐かしいものが

あり、印刷物にも独特の風合いがあったものです。

印刷会社には文選という専門職があり、ここでは入稿した原稿に使う活字を、活字棚から文選箱に集めていきました。それらは次の植字(ちよくじ)の工程に回され、ここで文章を正しく組んだり行間に詰め物(インテル)をしたり、罫線を入れた

りして組版を仕上げるのです。組版を納める箱をゲラ箱といい、校正刷りがゲラ刷りと呼ばれたゆえんです。

校正は初校、再校と進み、直しがゼロなら校了(責任校了)で下版となります。

下版後は、直接そのまま印刷する方法と、刷版といって紙型をとって鉛を流し込んだものを使う2通りがありました。印刷後は解版。鉛を溶かしてまた新しい活字を作ります。コンピューターが印字する現代は、活字と呼ばずにフォント。大きさも号ではなくポイントを使っています。



北海道開拓の村の旧小樽新聞社内にある昔の手作業の活版印刷機(上の活字も)

● 出前でアドバイスを
自分史など本をつくりたいと考えている人のために、印刷担当者と編集者がお伺いしてアドバイスをいたします。グループでもどうぞお気軽にお申し込みください。

● 記念誌で歴史を残す
企業や団体が二十年、三十年と歴史を重ねていくうちに、人が変

● 小紙をお送りします
忙しい毎日、ほっと一息つける話題を提供していきたいと願っている小紙です。ご希望の方に無料でお送りいたします。印刷紙工までお申し込みください。



本づくり質問箱

本づくりの「？」にお答えします。お気軽に質問をお寄せください。



葬儀のあり方について考えるセミナーに参加した時に配られた「エンディングノート」という冊子を見ると、これを拡大したものが自分史なのかなと思ひ当たりました。質問というよりは要領を得ない感想のようなものですが。

エンディングノートでは足りない

A エンディングノートのことは最近よく話題になりますね。自分が死んだ時に、遺された家族は何をどう執り行えばいいのか即時に判断を下さなければならないのですから大変です。そんな時に、ノートに記されたことに従っていけば慌てることもないというものです。

手元にあるノートは、送る立場になるであろう人と一緒に記入するようになっています。

その最初に「あなたの大切な方のご家族について」という項目があり、小中高の思い出や仕事のことを記すページです。それに続いて「あなたの大切な方の家系図」「あなたの大切な方の現在とこれから」などの項目も。

一通り記入すれば、ご質問のようにととても簡略化された自分史に見えないこともありません。でも、長い人生がそんな数行で表わせるはずはありません。もっともっとたくさんの出来事があり、それを家族や周囲の人に伝えておきたいという人も多いことでしょう。

それなら本にするのが最適ではないでしょうか。たくさんの部数は必要ありませんが、書くのに時間がかかります。すぐにでも取り掛かることをお勧めいたします。

